2013年3月18日〜3月28日

《チェルノブイリ原発事故》第4回ウクライナ調査報告

食事から放射能を抜いたら「奇跡」が次々と起きた

2012年10月1日

2013年3月24日

医者が治せなかった病気を治せたら、「奇跡」と呼んでいいとすれば、
ウクライナの子どもは次々と奇跡を起こしていました。
放射能の少ない食品をみな様からのカンパで無償提供し、
ウクライナの子を救いながら、福島の子も助かる道を見つけました。

食品と暮らしの安全基金
（旧称：日本子孫基金）

喜びあふれる子どもたち

**放射能を多く含むキノコと川魚を食べない代わりに、
放射能の少ない牛乳と肉を無償提供するプロジェクトを、
昨年11月１日から非汚染地域のコヴァリン村で実施。
３月には、医者が治せなかった病気の子が、治っていました。**

サメ肌が治ったヤーナ

[家族１]

サメ肌で、全身に湿疹やシミがあって、学校で仲間外れにされていた女の子ヤーナは、さまざまな病院に行って治療を受けていましたが、まったく治りませんでした。

「娘がひどい皮膚傷害で、息子は足が痛いと泣き出すのです」と、第３回聞き取り調査のときに母親が訴え、母親自身は「背中がかゆい」と言ったので、昨年10月１日に、超高純度ワセリンの「サンホワイト」と、イワシ・飛魚・昆布の微粉末を２kgほどレリャック家に提供しました。

この家族は、キノコは週１～２回、川魚は月１回くらい食べていましたが、プロジェクトが始まった11月からは、キノコも川魚も食べていません。

そして、10月の調査では、一番後ろに目立たないように座っていた12歳のヤーナは、別人のように明るくきれいになっていました。

「黒海へ２週間、保養に行ったときだけ、少し良くなった」と母親が言っていたので、放射能を体内から減らしたら良くなる可能性は示されていましたが、これほどの良い結果が出ることは、誰も想像していませんでした。

レリャック家	
父（ロマン）	42歳
母（アラ）	40歳
長男（ルスラン）	21歳
次男（セーニャ）	14歳
長女（ヤーナ）	12歳

シミもなくなり、ヘルペスも減った

長女ヤーナ　肌がすごく乾燥して魚のようだったけど、すっかり良くなりました。

母親アラ　ヤーナは、産まれてすぐから湿疹とシミがたくさんありました。

　ほとんど痛くもかゆくもないのですが、魚のウロコのようになった皮膚を見るのは、母親の私ですら気持ちが悪かったので、いろいろなお医者さんに診てもらったのですが、どこでも「治療法はない」と言われていました。

　それが、プロジェクトに参加させていただいて、魚の粉末を食べながら、食事を変え、いただいたワセリンを塗っていたところ、サメ肌もシミもすっかりきれいになりました。

　ヘルペスもよく出ていました。前は、目の淵から頬にかけてよく出ていましたが、今は１ヵ月に１回ぐらいになりました。

　風邪もひきやすかったんですよ。でも今は、風邪をひいてもすごく軽くすみます。

父親ロマン　今まで、どこの医者でも治療法はないといわれていたので、正直、こんなに良くなったことが半信半疑です。

　娘の肌が本当にきれいになって、ヘルペスの回数も減って、こんなうれしいことはありません。

タチアナ（プロジェクトを企画・実施した責任者の女性）　サメ肌を友だちも気持ち悪がり、うつらないとわかっていても避けられていたので、ヤーナは気持ちが沈みがちで、暗い子でした。でも今はすっかり明るくなっています。

　この家族は村に親戚が 30 人ほどいて、みんなでヤーナを心配していました。どの医者にかかっても治らないといわれていたサメ肌が簡単に治ったのに驚き、親戚全員がとても喜んでいます。

泣き出すほどの足の痛みがなくなった

母親　次男のセーニャは、足が痛くて泣き出すことがよくありました。フランスに１ヵ月保養に行ったときは少し良くなりましたが、また痛くなっていました。

次男セーニャ　サッカーをすると、左の脛の骨が痛くなりました。眠れないほど痛いのが悩みだったけれど、年が明けるころからほとんど痛まなくなりました。

　痛みは３歳ごろからずっとありましたが、治ったという感じがして、今が一番快適です。

母親　私は背中のかゆみが消えました。でも、体重がまったく増えなかったことが一番うれしい。笑わないでほしいけど、冬は７kgも増えていたのですから。

父親　私は 1970 年生まれです。原発事故のときは 16 歳で、甲状腺障害の登録をしています。事故から１年後の 1987 年６月に腰の骨に病気が出て、最後の手術は今年２月 28 日に行ったばかりです。手術したので足は動きませんが、私も体調はいいですよ。タバコをやめてから太り、106 kgになっていましたが、プロジェクトが始まって体重を減らすことができ、現在は 95 kgです。

※ サメ肌や皮膚のかゆみが放射線で起きていた原理がわかる方は教えてください。

頭と足のつらい痛みが消えた

[家族2]
子どもたちはキノコを好まず、ナスチャが少し食べただけ。
川魚は、週一度くらい家族で食べていました。
長女はつらい痛みが消え、三女は元気になりました。

キリレンコ家	
祖母(ガリーナ)	70歳
父(ニコライ)	35歳
母(ソーニャ)	32歳
長女(ナスチャ)	13歳
次女(ナーヂャ)	7歳
三女(アーラ)	6歳

頭痛も足の激痛もなくなった

ナスチャ　頭痛が本当にひどかったんです。痛くて痛くて、薬ばっかり飲んでいました。いつも目の下が青や黒いクマになっていたし、口の周りには何かできていて……。

辛かった頭痛が消えたのは12月初め。その2日ほど後には口の周りのできものが消え、それから目の下のクマも消えました。

手足にも痛みがあり、一番痛かったのは膝の周りです。寝ようとすると痛みが出てくるので、お母さんが薬をくれたけど、効かなくて、筋肉がひねられるような痛みで寝られません。それで、部屋の中をぶらぶらしたり、映画を見たりして時間を潰していました。

足のひどい痛みがなくなったのは12月の終わりころで、今は、痛くなっても前のような激痛ではありません。

母親ソーニャ　風邪もあまりひかなくなりました。年に数回は風邪で入院していたのに、今年は流行したインフルエンザにかかっても体調が良くて、入院しませんでした。

ナスチャには肺腫瘍があります。生まれつきだそうですが、それを知ったのは2009年です。近くの病院に入院したとき、結核だと言われ、キエフの大きな病院に入院したら、腫瘍が見つかりました。それからは年に数回、入院して検査や治療を受けています。

ナスチャ　前は「自分の体は弱い」と感じていましたが、今はだるさがなくなって、元気が出てきています。

前は、顔も黄色っぽかったけど、今はピンク色になって、「きれいになったよ〜」と、みんなが言ってくれるのがうれしいです。

「よくなったよ〜」とアーラ

母親　3女のアーラは、手足や頭を痛がることはありませんでしたが、弱々しい子でした。

でもプロジェクトが始まってから、元気な子になりました。今、風邪をひいていますが、それでも元気。こんなことは、前にはなかったことです。

９家族の調査報告

食事から放射能を抜いたら改善！

放射能の非汚染地域にあるコヴァリン村で暮らしていて、足や頭が痛かったり、治らない病気の子を持つ９家族に、牛乳と肉を無償提供し、健康状態を日記に付ける代わりに、放射能汚染されたキノコと川魚を食べない、という調査を2012年11月１日から2013年３月中旬まで行いました。

８家族は、チェルノブイリ原発から35km圏のノーヴィーミール村に、事故後も６年間暮らし、それから1992年に強制移住させられた人たちで、１家族だけは、コヴァリン村で暮らしてきた人たちです。

３月19日と24日に聞き取り調査を行うと、ほぼすべての子と親の体調が、格段に良くなっていました。　　編集長　小若順一

第４回調査団	
団長	小若順一（本誌編集長）
副団長	丸田輝夫（第３回調査参加）
	丸田晴江（本誌副編集長）

◆これまでの調査報告は、食品と暮らしの安全基金ホームページに全文公開しています。

訂正１
学校に食品を贈らないで

先月号に「学校に食品を贈ってください」と書きましたが、私たちが送った「だしスープ2000袋」がすべて戻ってきました。

食品には高い関税がかかり、受け取るのが学校でも、個人でも大変なことがわかりました。

したがって「学校に食品を贈って」は取り消し、「学校に食品を贈らないで」に訂正します。

すでに送ってしまった方には、深くお詫び致します。　　小若順一

訂正２
コヴァリン村の放射能摂取量は「１日10ベクレル」より少ない

今回、調査したコヴァリン村での放射能摂取量を、第３回調査報告で10ベクレル/kgとしましたが、これは間違っていました。

９月から10月にかけてはキノコがよく取れる時期なので、遠来の客をもてなすため、どこの家でもキノコをたくさん出してくれましたが、村人はそんなに食べていませんでした。

１日の食事から10ベクレルよりかなり少ないセシウム137を摂取していたら、痛みが生じていた、と訂正します。

この裏に、測定が難しいストロンチウム90が隠れていると考える必要もあります。

「頭痛がないよ」とうれしそう

[家族３]

長男セルゲー　頭がとっても痛かったんだ。でも今は、どこも痛くないよ。

母親アリョウーナ

昨年９月に学校へ入学したセルゲーが、週に１度くらい頭痛を訴えるようになりました。頭全体をとても痛がっていたのです。

プロジェクトが始まって１ヵ月ちょっとたった12月に、「頭が痛い」と言わないことに気付きました。それからは、一度も頭痛を起こしていません。

以前は、よく風邪をひいていました。１人がひくと必ずほかの子にうつり、４人を連れて入院することが年に３～４回ありました。

プロホレンコ家	
父（アンドレイ）	30歳
母（アリョウーナ）	26歳
長男（セルゲー）	７歳
次男（ビクター）	６歳
長女（アニャ）	３歳
次女（マーシャ）	３歳

※アニャとマーシャは双子

今年は２回ほど風邪をひきましたが、鼻水程度ですみ、入院していません。

10月まで、親たちはキノコを２週間に１度ほど食べていましたが、子どもには食べさせていませんでした。

足の痛みがなくなり、鼻血が出なくなった

[家族４]

ディアナ　プロジェクトに参加する前は、ときどき足と頭が痛くなっていました。

足は、脛のあたりがねじられるように痛かったんです。寝てしまえば大丈夫だけど、寝る前に痛くなるので、寝られなくて困りました。

冬になると風邪はひいたけど、ひきやすいというほどではなかったと思います。鼻血はよく出ていましたが、この冬は出ませんでした。

ジャンキフスキー家	
父（ウラジーミル）	44歳
母（リュドミラ）	39歳
長女（ディアナ）	14歳
次女（イワンナ）	12歳
三女（ウリヤナ）	３歳
四女（ルスラナ）	２歳

足の痛みがなくなり、頭痛が減り、鼻血も出なくなって、全体的に元気になってとても良かったです。

足の痛みで泣き出していたイワンナ 手の感覚がなくなっていた母

イワンナ　頭や足がときどき痛かったけど、頭の痛みは減りました。

母親リュドミラ　自分では忘れているようですが、イワンナは寝ていると「足が痛い」と

泣き出したこともあったんですよ。特に天気が変わるときに痛みが出ていました。今でも１ヵ月に１回ぐらいは痛みが出ますが、それは軽い痛みで、２人ともずいぶん健康になりました。

子どもたちの足の痛みが良くなったのと同時に良くなったのが、私の手です。

朝起きると、手の感覚がなく、まるで手がないような感じで朝の仕事を始める毎日が続いていたのが良くなりました。

まだ天気の変わり目には少し症状が出ますが、１～２週間に１度くらいに減ったので、こんなにうれしいことはありません。

10月まで、キノコは、１ヵ月に１回か２回、川魚は週１回ぐらい食べていました。

心臓の痛みが減り、鼻血も出なくなった

[家族５]

ナスチャ　頭の痛いことがよくありました。それがかなり良くなりました。熱もよく出ていましたし、秋までは鼻血もよく出ていましたが、この冬は一度も出ませんでした。

心臓に問題があって入院したこともあります。そのときの検査では、自律神経症でした。医者から完治したと言われましたが、実際は刺すような痛みが残っていて、それが今回のプロジェクトでずいぶん良くなりました。

祖母ガリーナ　初めて心臓が痛いと言いだしたときのことは、本人も覚えていないでしょう。なにしろ２～３歳のころのことですから。そんな小さな子が「心臓が痛い」と言うので、この子は何を言うのかと最初、大人たちは笑ったんですよ。でもナスチャは自分の胸をさして「ここが痛い」というので、びっくりして、あわてて病院に連れて行きました。そこでは心電図が取れないと言われ、心臓病の専門病院に連れて行って入院すると、手術の必要はないと言われました。

コプチロ・コバリチュック家	
祖父（ミハイル）	**73歳**
祖母（ガリーナ）	**62歳**
父（イワン）	38歳
母（イリーナ）	36歳
娘（ナスチャ）	**15歳**

でも痛みはずっと続いていたのです。

キノコは月に２回、川魚は２～３ヵ月に１回くらい買って食べていました。

祖父ミハイル　孫が元気になってきているので、うれしいですね。ナーチャは学校から帰ると、とても疲れた顔をしていたので、心臓のせいだと思っていました。

頭痛は２週間後、心臓の痛みは９週間後に

[家族６]

コプチロ家（近くに住むイリーナの姉家族	
母（オクサーナ）	41歳
長男（イワン）	20歳

長男イワン　よく頭痛がしていました。その頭痛が、食事を変えて２週間後から軽くなりました。

心臓も痛くて、前は軽い薬を使っていました。でも今年に入ってから心臓の痛みは軽くなっています。背中も以前から痛かったのですが、あまり痛くなくなりました。

10月まで、キノコは月に２回、川魚は２ヵ月に１回くらい食べていました。

◇**祖母ガリーナ**さんは、昨年９月末、一緒にキノコ採りをしてくれた。1996年に甲状腺の一部を切除していた。今年２月５日に全摘手術を受けたが、首にまだ赤い傷跡があった。そこで、私がパープル色のパールのネックレスを、長さを調節してかけると、一度で完璧に傷跡が隠れたので、大変に喜ばれた。

めまい、頭痛がなくなってうれしい

[家族７]

ヤレマ家	
曾祖母（ウリヤナ）	86歳
父（アナトリー）	37歳
母（エレーナ）	31歳
長女（マリーナ）	12歳
次女（アリーナ）	７歳

マリーナ　頭がとても痛かったんですが、昨年末から痛くなくなったので、とてもうれしいです。めまいもあって、いや～な感じで５分ぐらい続いていたのですが、それもなくなって、すごく楽になりました。

腕が少し痛かったのですが、痛みはまったくなくなりました。

足は、前から痛くありません。

アリーナ　秋ごろまで頭が痛かったし、足が痛かったけど今は痛くないです。足は、特にヒザのあたりに痛みがありました。

母親エレーナ　子どもたちは弱い感じだったんですよ。でも今は元気になりました。

気分が良くなって、子どもが活発になったのが一番うれしいですね。

私自身も元気が出ました。頭痛とともに、関節も痛くて、いつも横になりたい疲労感がありました。それが、完全とは言えないかもしれないけど、このわずかな期間でとても元気になりました。

10月まで、キノコは２週間に１回ぐらい、川魚も同じくらい食べていました

父親アナトリー　子どもたちには頭痛があって、手や足の関節も痛がっていて、体が弱い感じでした。それがすごく良くなったことが、とてもうれしいです。

このプロジェクトに参加させてもらえて本当に良かった。ありがとうございます。

めまい、頭痛が減り風邪も軽く

[家族８]

このプロジェクトを具体的に企画し、推進したタチアナさん自身にも、プロジェクトに加わっていただいたら、意外な悩みがあったことがわかりました。夫妻はコヴァリン村に住み、３人の娘たちはキエフに住んでいます。軍に勤めるご主人がキエフに通勤するとき、自家菜園の野菜・果物、村や途中にあるボリスポリ市の市場で購入した肉、牛乳、魚などを娘たちに届け、それは、娘たちが食べる食材の８割ぐらいとのこと。10月まで、キノコは週２回、川魚は週１回ほど食べていました。

アンドロシェンコ家	
父（ミハイル）	48歳
母（タチアナ）	46歳
長女（カーチャ）	26歳
次女（サーシャ）	23歳
三女（オリガ）	14歳

週に２～３回はめまいが起きて、景色がぐるぐる回り始めたり、ぐらぐら揺れたりしていました。家では横になって過ごしますが、外で歩いているときには、木に寄りかかったり、しゃがんだりして、めまいがなくなるまでじっとしているしかありません。

めまいは断続して数時間続き、それで治まるのですが、10分から15分ぐらいで治まると、その後にとても痛い頭痛が始まるので、薬を飲むしかありませんでした。

それが今では、２週間に１回ぐらいに減り、症状も軽くなり、すごく楽になりました。

めまいの原因は、自律神経失調症と診断されています。この病気はチェルノブイリ原発事故以前は50歳以上の人がかかる病気でした。30代では起きていなかった症状なのに、今では子どもにも起きています。

私は毎年、冬にはよく風邪をひいて、すぐに40度の熱が出ていました。それが、この冬は風邪をあまりひかなかったし、風邪かなと思っても２日ぐらいで治りました。インフルエンザも流行しましたが、この冬はかかりませんでした。これが健康になった証拠です。

鼻血が止まった三女

三女のオリガは、よく鼻血を出していました。小さいころから、朝起きると寝具に血痕があることがしばしば。毎日続くこともあったので鼻の粘膜を焼く治療をしたら、その後、鼻血を出す頻度は１ヵ月に１度と減りました。ところが、授業中に突然、大量の鼻血を出すようになってしまいました。しかも、治療後４ヵ月たつと、２週間に１度と、出る回数が増えました。

それが、11月以降は、一度も鼻血を出していません。別の対策を講じていないので、食事を変えた以外に原因は考えられません。

次女のサーシャは３歳のころから胃炎で悩んでいました。この胃炎は、完全には治ってはいませんが、かなり改善しています。

冬に風邪で入院しなかった長女

原発事故時に妊娠中だった長女のカーチャは、教師をしています。毎年冬になると風邪をひき、いったん風邪をひくと高い熱を出して、２週間ほど勤めを休むことになり、肺炎に進行してしまうこともありました。

でも、この冬は、風邪をひいても喉が痛い程度で治ってしまいました。こんなことは初めてです。

表紙の男の子

ミーシャの「奇跡」はこうして

シンカール家	
祖父（アレクセイ）	62歳
祖母（カーチャ）	66歳
父（ビクター）	40歳
母（エレーナ）	35歳
長男（ミーシャ）	11歳
二男（アンドレイ）	8歳
長女（オクサーナ）	7歳

[家族９]

ミーシャと出会ったのは、昨年10月1日、24人の子に聞き取り調査したときです。直後の親との会合で「孫が7歳から手足の動きがおかしくなりました。医者は、原因不明で治らないと言っています」と聞きました。

第3回の調査が終わった帰国前日の夜、キノコを食べない代わりに、無償で肉と牛乳を提供し、体調の日記をつけてもらうプロジェクトを決定。タチアナさんが人選し、11月1日にスタートしたときは、私が提案したように川魚も食べないことになっていました。

ただ、チェルノブイリ原発の35㎞圏から強制移住させられた家族だけが参加し、元からコヴァリン村に住んでいたミーシャの家族は外れていたので、私が指示して入れてもらいました。

ある日、よく歩けるようになっていた

ミーシャ　ある日、気がついたら、よく歩けるようになっていて、友だちからも「よく歩けるようになったね」と言われました。

祖母カーチャ　12月に気がついたのですが、かなり普通に歩けるようになったので、足は良くなってきています。腕はまだ良くなっていませんが、少し動くようになりました。

前はスプーンをうまく使えず、食事のときに回りを汚していましたが、今はあまり汚くなりません。

ミーシャは慢性気管支炎で、よく風邪をひいていましたが、この冬は鼻水が出たぐらいで、ひどい風邪をひきませんでした。

こんなに良くなるとは、まったく思っていませんでした。

魚の粉だし（イワシ、あご、昆布）をミーシャは大好きで、1日3回食べています。

以前は、月に1回ぐらい魚を食べていて、ドニエプル川の魚を食べることもありました。

固まった腕が大きく動いた

肢体不自由児のようだったミーシャは、歩き方が良くなったと聞いていたのに、3月19日の時点では、まだ足首が少し内側に曲がっていて、症状が十分に残っていました。

腕も指も多少は動くのですが、自分で動かそうとすると、固まってしまいます。

私が腕に触ると、曲がったまま固まって、伸ばそうとしてもびくともしません。

マッサージすると、両肩の後ろから肩甲骨のあたりに大きなしこりがありました。

右腕をしつこく揺すっていると、少し肩の可動域が広がって、ミーシャは自分で肩を回し始めました。それでミーシャを良くできることは確信しましたが、この日だけで良くするのは無理と判断。

翌日から4日間、南へ取材に出るので、そ

の間に神経組織を少しでも回復させ、24日に再訪問し、野口体操のマッサージを本格的に行って奇跡を起こそうと考えたのです。

４日間でもミネラルとレシチンをたっぷり補給すれば、神経組織を少し正常に戻すことができるはず。

そこで、持参したエキストラ・バージン・オリーブ油に、イワシ、あご、昆布の微粉末と、ミーシャの家にあった酢を入れて、混ぜ合わせた「ミネラル・ペースト」を作り、それをスプーンで３人の子どもたちに食べさせると、みんな「美味しい」といいます。

それで、毎食事ごと３人に大さじ１杯を食べさせるよう伝えました。

野口体操のマッサージで

５日後の24日午後にミーシャの家へ行くのですが、その間に泊まった寒いホテルで風邪を引き、800㎞も続いた悪路で軽いギックリ腰も起こし、24日の朝は歩くのがやっと。正座もできません。

正座しないと、野口体操流に全身をほぐせないので、足に痛い指圧をして、何とか正座できるようにしました。

まず、ミーシャを仰向けに寝かし、私が正座して、ミーシャの足首を持って全身を揺すってほぐしました。特に狙ったのは、肩甲骨のしこりです。

ウクライナ語で「力を抜いて」と10回声をかけてもらい、揺すっていると、かなり全身がほぐれてきました。

次は、固まっている右腕をほぐすのですが、曲がったまま固まっているのを、揺すりながら揉んでいると、しばらくしてほぐれ始め、

１㎝ほどから、だんだん可動域が大きくなって、ときどき、完全に伸ばしたり曲げたりできるようになりました。

まだ、固まって動かなくなることもありましたが、右腕を自分の意志で曲げたり伸ばしたりできると、家族たちは歓声を上げました。

それまで家族は、半信半疑で見ていたはずですが、ここからは全員がニコニコになってミーシャと私を見るようになりました。

次は、肩の後ろから肩甲骨にかけてのしこりを、細かく揺さぶる指圧でほぐしました。通常は非常に痛い指圧をするのですが、相手は子どもなので、痛い指圧は一切しません。

押しても緊張させないよう、野口体操を応用した指圧です。

足首から先が少し内側に曲がっていたので、私が腕を揺すっている間、丸田氏に足首を揺すってほぐしてもらいました。すると、足首も少しずつほぐれてきました。その結果が、足がまっすぐ前に出て歩いている表紙の写真です。

ほとんど使っていない左腕に触ると、こちらはほぐれていました。そこで、肩関節の可動域を広くするように細かく揺すりました。

それが終わると、私はミーシャの右側に座わり、左腕を何度か上げて、同じようするよう促すとミーシャは、左腕を何の抵抗もないかのように上へ上げたのです。

３年間、上がらなかった左腕が上がったので、家族は目を丸くして声も出ません。

私が、「ミーシャ」と声を掛けながら、さらに促すと、そのたびにミーシャも腕を上げたり下げたりし、５回、６回と続いたので、みんな大喜びとなり、歓声が上がりました。

とりあえず、予定どおりに奇跡が起きたので、うれしそうにしているミーシャの顔を、私は両手でくしゃくしゃになでました。

その後、外に出て歩いてもらって撮ったのが表紙の写真です。スムーズな歩きに、みんなが拍手を送りました。

※ミーシャが７歳から肢体不自由児のようになっていったのは、ほとんど細胞分裂しない神経が、放射能の影響でダメージを受けたためと考えられます。ただ、この症状が出た原理がわかりません。それを推定できる方がいらしたら教えてください。

15 分の作品にして学校で上映

ミーシャと最初に出会った日は、障害児をしつこく撮影したくないというのが私たちの共通認識で、彼をほとんど撮影していません。だから、当初の映像はほんの少ししかないのですが、でも、ほんの少しだけあるのです。

ですからミーシャは、初の奇跡の子として、これからも取り上げ続けられるでしょう。

ミーシャが、これから治っていく様子を撮影してもらうため、ウクライナ・チェルノブイリ連盟に寄付して協力を要請してきました。

行政、マスコミ、医師、弁護士グループは

現地取材・調査を！

私たちが見つけた低レベル放射能汚染によるさまざまな被害とその回復ぶりを、行政、マスコミ、医師や弁護士グループに検証していただきたいと思います。

もし、取材や現地調査をされるなら、私たちがお願いしている通訳、コーディネータ、車と運転手を紹介しますので、小若までご連絡ください。

経費は１日 700 ドル（子どもを救うカンパ込み）。宿泊が必要なほどキエフから遠くへ行く場合は、車の料金が 50 ドルほどアップし、この３人の宿泊費と食事代が加わります。

また、小若を通して行かれる方には、ミーシャの昨年と今年のビデオ映像を無償提供します。

野口体操

野口三千三（みちぞう）(1914 ～ 1998) 東京芸術大学教授が行っていたのが「野口体操」で、力を抜くことで、体がよく動くようになるのを追求した体操です。私はミーシャに、力を抜くよう通訳に言ってもらいましたが、「がんばれ」とは一度も言っていません。ミーシャはおそらく「力を抜け」と指示されたことはなかったとも思います。

私が左腕を上げて、「ほらっ」と促すと、ミーシャは左腕を上げました。写真は何回目かに上げたときのもので、最初は見事にまっすぐ上がったのです。

人間の動きは、ちょっとしたことでまったく違ってきます。私がウクライナにあと１週間滞在すれば、ミーシャはどんどん良くなったでしょうが、そんな余裕はなく、帰国しました。

時間はかかるでしょうが、ミーシャは完全に治ると私は確信しています。

私は腰痛を治そうと野口体操教室に通い始め、先生の晩年に 13 年、師事しました。野口先生を撮影するのは私が一番うまかったので、先生の写真の多くと、野口体操のビデオは私が撮影したものです。

野口体操に基本形はありますが、定型はありません。先生が亡くなった後は、弟子がそれぞれ自分流に継承した野口体操教室を開いていますが、野口先生の能力は抜きん出ていたので、弟子が野口体操を発展させるのは無理。ですから、あちこちで開かれている野口体操教室に行っても、野口先生の 10 分の１か、100 分の１ほどしか魅力はないと考えて間違いありません。

野口体操の理論は先生の著書に残っていますが、本当の魅力はビデオ映像にしか残っていません。

※「野口体操」と「野口整体」は別のものです。

低レベル放射能汚染による人体被害
これまでと、これから

足や頭が痛い子、皮膚障害や神経障害で病院に通っている子がたくさんいる村で、その子の家庭の食事から、放射能を多く含む食材を抜いたらどうなるかを実験すると、ほぼすべての人が元気になり、困っていた症状が消えたり、軽くなりました。

世界で唯一、初のプロジェクト

低レベル放射能が原因で、痛みや皮膚障害や神経障害が出るという情報はなかったので、この４ヵ月余りの食事改善プロジェクトは、世界で唯一、初めての実験だと考えられます。

そして、これまで人体に影響が出ると知られていた放射能よりもはるかに微量で、人体にさまざまな傷害が出ていたことを、世界で初めて実証することができました。

この成果は、みな様から多額のカンパをいただいたお蔭ですので、深くお礼を申し上げます。

このカンパを基に、どのような筋道をたどって重要な発見ができ、今、何をしようとしているかをお知らせします。

２～３週間の保養ではダメ

放射能に影響を受けて弱った体が、保養で回復することはよく知られた事実です。

ウクライナにも保養施設を安く利用できる制度があります。しかし、保養期間は２～３週間なので、体内の放射能は少ししか抜けません。家に戻ると、少し良くなった体がすぐに悪くなるのは明らかです。

それでも保養は、てっとり早く行うにはいい方法なので、症状が、どう回復するかを知るためにまず、ものすごく体調が悪かった26歳女性のナタリアに70日間、非汚染地域で保養してもらいました。

ナタリアは45日目までは良くなりませんでしたが、そこから良くなり始め、54日目には医師の診断でもかなり良くなっていて、70日たつとすっかり治っていました。

つまり、良くなったことが実感できるまでに６～８週間、ほぼ完全に良くなるのに10週間かかったわけです。

ナタリアは、第３種汚染地域に住んでいましたが、今は首都キエフに住み、自分が出た大学で秘書をしています。今回も会いましたが、体調は良く、今年夏に結婚して、来年からは大学で教えるようになりそうだとのこと。

みな様からのカンパで助けてもらったことを深く感謝していました。

２ベクレルの食事で健康障害が出ていた

次が、今月号でご報告したコヴァリン村でのプロジェクトです。

コヴァリン村の食材は、食品ごとに設定されたウクライナ基準をすべてクリアしています。

ただ、検出限界が10ベクレル/kgで「不検出」のため年次報告に数値が出ていません。

数値があるのは、私たちが検査したキノコの210ベクレルと、昨年データが見つかったという川魚の平均8.6ベクレルだけです。

ナタリアが住んでいたビグニ村の地域は、精度の高い機械で測定していて、野菜以外の食材は２ベクレルを超えていました。

この地域より、コヴァリン村の汚染度はかなり低いので、最短２週間、多くは５週間ぐらいから良くなったと考えられます。

痛みを起こす最低値＝閾値を見つける

では、放射能はどのレベルから痛みを起こすのか、それを今回、調べて来ました。そして、痛みが出ている学校と、出ていない学校の境界ラインをだいたい突き止めました。

そこで、痛みが出ている学校で、生徒の１日分の食事を作ってもらい、検査に出しましたが、まだ一部の検査結果が届いていません。

このことは次号で報告しますが、現在までで、福島の子を守れる基礎データをほぼ得ることができました。

でも、ウクライナで調査に協力してくれた子どもたちが苦しんでいるに、その子を放っておくことはできません。

そこで、２つのことを仕掛けてきました。

ウクライナの子どもも守る

１つは、チェルノブイリ連盟に撮影・録画器材を２式と、3000ドルを寄付して、コヴァリン村で良くなった子どもと家族の短編作品を作ることを依頼したことです。

ミーシャを筆頭に、良くなった子の実例を紹介した15分程度の作品ができる予定です。

完成したら、若干のカンパを届けて、作品を健康被害が出ているウクライナの学校で上映して回れるようにすれば、足や頭に痛みがある子や、風邪をよくひく子、原因不明の嫌な症状で苦しんでいる子は、食事を変えて治そうと思うようになります。

そうなれば、実際に治って元気になる子が出てくるので、そこからウクライナに、子どもの健康被害を治すいい循環が生まれてくるだろうと期待しています。

もう１つは、第３種汚染地域で訪問した２つの学校の子を助ける新たな企画です。

２つの学校がある地域では、痛みの出ない２ベクレル以下の食材は、野菜しかないので、主食でない数品目の食材を食べないようにして成果を挙げる今回の手法は、通用しません。

ストロンチウム90、セシウム137対策に
カルシウム肥料、カリウム肥料を撒く

そこでみな様から２つの学校の子を助けるためにいただいた10,000ドルで、食品を贈らずに、化学肥料を贈ることにしました。

２つの学校の子どもたちに食品を贈っても、痛みが消え始める前に資金が尽きるので、２村へ、カルシウム肥料とカリウム肥料を贈り「ストロンチウム90とセシウム137を農作物が吸収するのを減らす」ことを行います。

チェルノブイリ連盟は、汚染がひどくて人が住んでいない地域にハウスを建て、その中で化学肥料を使って安全な野菜を生産するプロジェクトを考えていたので、私たちに協力してくれることになりました。

化学肥料に嫌悪感を持たれる方もおられるでしょうが、ウクライナ西部のような放射能汚染地帯で有機肥料を用いると、放射能を畑に加えることになります。地下資源を原料にした化学肥料でないと、農作物の放射能を減らすことはできません。

４月13日、タチアナさんがモジャリ村の議長に会い、当方の希望を伝えたところ、議長は満足し、農業専門家に協力させることになったと報告が入りました。

驚いたのは村の規模が大きいことで、村人が利用している土地は1000ヘクタールもありました。5000ドルでは、10分の１の土地にしか、化学肥料を撒くことができませんから、とりあえず、子どものいる家庭を優先してもらいます。

村人全員を救うのは、「食品と暮らしの安全基金」の規模を上回りすぎているので、国の予算などを回してもらう必要があります。こういう資金を得ることができる方は、ご助力をお願いします。

小若順一

「安全基金」の活動と考え方㊾

栄養不足の原因をつくったのは医師

「医師と一緒にウクライナ調査をすべきだ」と何人もの方から、ご意見をいただいていました。

私も、できればそうしたかったのですが、「微量放射能で出る痛みを調べてくれる医師がいますか?」というのが回答です。

ウクライナには、「痛み」を訴える子が多いことを第３回の調査で見つけたので、調査データを添えて、放射線研究センターでチュマク所長に話すと、ニコニコしながら「ライフスタイルが変わってゲームばかりするようになったことと、栄養が足りないせいです」と言われました。

今回、うまく歩けるようになったミーシャは、面長だったのに、顔が丸くなるほど太っていたので、栄養不足の面があったことは間違いありません。

しかし、牛乳と肉で、肢体不自由の症状が良くなることはありません。体内の放射能が減ったから良くなったのです。

問題は、なぜ栄養が足りなかったかです。

今回の報告にあったように、体調の悪い子がいる家庭は、医者代、薬代、入院費が必要で、自給生活で所得の少ない家は、非常に貧しくなっていたのです。

今回、コヴァリン村で調査した子どもたちを診ている医師と話す機会がありました。

治療しても良くならなかった子どもが、食事を変えたら治ったというのに、放射能のことはあまり気にしていません。

「このような調査を行うには、まず医師が必要です」と言い、「まず、子どものタンパクを測定する」などと言うのです。

足が痛くて泣き出した子や頭痛で寝られない子には鎮痛剤、肌がかゆかったら軟膏、風邪を引いたら入院させてビタミン剤などという治療を行っていたのに、何の反省もしていません。

放射能で症状が出ていたのに、医師が治せないから、治療費がかさんで貧しくなり、栄養不足が加わったのです。そのことに診察していた当人は気づいていません。

では、日本はどうでしょうか。

福島で避難生活をしている人が、医師に「疲れて、頭痛がする」と訴えると、「避難生活でストレスがたまっているのですよ」と、薬と栄養剤が処方されますが、「放射能の少ない食事をするように」とは言われないでしょう。

『医者があなたに言わないこと』を連載中の寺澤政彦医師は、症状が出た原因は何かを突き止めようとします。原因を取り除けば再発しないので、原因を除去できる医師が名医なのです。しかし、そういう名医はめったにいません。

食品の現行基準は論外で、検出限界以下の微量放射能が含まれた食品を摂り続けると、さまざまな症状が出ることが、今回の調査で判明しました。そして、このことを６月の国際学会で発表します。

微量放射能でいろいろな症状が出ることが医師の常識になれば、見落とせば「誤診」になります。

そうなれば、福島はもとより、関東や東北の汚染地域で、その地域の食品をよく食べている人も救われるので、今月号の情報を、みんなで広げてください。

食品と暮らしの安全基金代表　小若順一

放射能で
苦しんでいる子を
治そう！

《カンパのお願い》

＜振込先＞

ゆうちょ銀行振替口座
口座記号番号　00160−3−512738
口座名　特定非営利活動法人食品と暮らしの安全基金

※他行等からの振込をご利用される場合は、下記振込先をご指定ください。
店番　019
当座　0512738
口座名　トクヒ）ショクヒントクラシノアンゼンキキン

NPO 法人　**食品と暮らしの安全基金**
（旧称：日本子孫基金）

〒338-0003 埼玉県さいたま市中央区本町東 2-14-18
TEL 048-851-1212　FAX 048-851-1214
ホームページ　http://tabemono.info/